

【論文】

テキスト・現実・個性

—E. サイドとポストコロニアリズムにおける文化研究の両義性—

橋本 直人 HASHIMOTO, Naoto

I ポストコロニアリズムとその批判

——文化研究の両義性の一断面

ポストコロニアリズムが急速に拡大・発展してきた要因の一つとして、この分野で展開された文化研究、とりわけ言説・テキスト分析のインパクトを挙げられよう。そして、このブレイクスルーにおける重要な契機が、エドワード・サイードの『オリエンタリズム』であったことも、おそらく言うまでもあるまい。

フーコーの言説概念を導入することで、サイドは「西洋ならざるもの」としての「東洋」が、『西洋ならざる東洋』ではないものとしての「西洋」と同じく、言説による構築物であることを詳細に分析した¹。その方法論的なスタンスは、以

¹ ちなみに、サイドは『オリエンタリズム』でフーコーの『知の考古学』と『監獄の誕生』を参照しているが、私見ではむしろ『狂気の歴史』の時期のフーコーとの関連の方がより明確であるように思われる。

たとえば、『狂気の歴史』初版の序文（この序文は以後の版では削除されている）でフーコーはこう述べている。

西洋の理性の普遍性の内には、東洋というあの分割が含まれている。すなわち、起源として考えられている東洋、郷愁と回帰の約束とが生まれでる…東洋、植民地主義の西洋の理性の犠牲になっているけれども、常に限界の地であるために無限に近寄りがたい東洋。すなわち、端緒の闇夜——西洋がそこで形成され、そこに西洋が分割線を引いてしまっている端緒の闇夜たる東洋は、西洋にとっての西洋ならざるものである。[Foucault [1961] 2001: 189-190=1975: 10]

『狂気の歴史』の中ではやや唐突に思えるこの一節の意味は、『オリエンタリズム』での以下の一節と対応させれば極めて明瞭となろう。

下の個所から確認できる。

私は、ミシェル・フーコーの……言説概念の援用が、オリエンタリズムの本質を見極める上で有効だということに思い至った。つまり、言説としてのオリエンタリズムを検討しない限り、啓蒙主義時代以降のヨーロッパ文化が、政治的・社会的・軍事的・イデオロギー的・科学的に、また想像力によって、オリエンタを管理し、あるいはむしろ生産させた際の、その壮大な規模の体系的なディシプリンを理解することは不可能なのである。

[Said 1978: 3=2002: (上)21-2]

私は『オリエンタ』が不活性な自然の事実ではない、という前提から出発した。東洋 Orient とは単純にどこそこと示すことのできるような場所のことではない。他ならぬ西洋 Occident がまさしくそうであると同様に。…歴史の実体たることは言うにおよばず、地理的実体でもあり、また文化的実体でもあ

……東洋人は嘆かわしい部外者という表現がもっともふさわしいようなアイデンティティを共有する、西洋社会の中の諸要素（犯罪者、狂人、女性、貧乏人）と結びつけられたのである。[Said 1978: 207=2002:(下)23]

さらに「言説による構築」については、『狂気の歴史』に関するインタビューでのフーコーの以下の発言を参照。

狂気は自然の状態では見出されないものなのです。狂気は社会の中においてしか存在しない。狂気は、それを孤立化させる感受性の諸形態、それを排除し、あるいは補足する嫌悪感の諸形態から独立して存在するものではないのです。[Foucault [1994] 2001: 197=1998: 207]

る『東洋』と『西洋』といった局所、地域、または地理的区分は人工物 *man-made* である。したがって、他ならぬ西洋がそうであるように、オリエントもまた、思想・形象・語彙の歴史と伝統とを備えた一個の観念なのである。そしてオリエントが、西洋に内在するものとして、また西洋の身代わりとして、実現し存在することになったのも、これら歴史と伝統によってであった。[Said 1978: 4-5=2002: (上)24-5]

サイドはこうしたアプローチによって、直接的にオリエントを分析する専門家の文献からフローベールやネルヴァルなど一見植民地支配とは無縁に見える作家・詩人に至るまでの膨大な言説が、いかにして「東洋」を構築し、「西洋」にととの認知と操作の客体として位置づけることに関わっていたかを分析した。そしてサイドのアプローチと、彼による「西洋」文化と植民地支配との共犯関係ないし「西洋」文化の「東洋」に対する抑圧性の暴露は大きな影響を及ぼし、「言説分析による本質主義批判」は以後のポストコロニアリズムにおける重要な要素となって今日にまで至っている。

だが、ポストコロニアリズムにおけるこうしたアプローチは、近年さまざまな批判にさらされている。というのも、言説分析は「さまざまな言説に先んじて独立して存在すると考えられた『実体』が、現実には言説によって構築されたものである」ことの暴露によってこそインパクトを生み出すことができたのだが、こうした前提はひるがえって「いかなる社会関係も、それゆえ抑圧や排除も言説と無縁ではなく、したがって言説の中で展開されるがゆえに言説の中で分析可能である」という含意を生じることとなるからである。そして実際、ポストコロニアリズムにおいては「現実の」社会的な抑圧や排除に対する批判が言説の（実際には文学を中心とするテキストの）内在的分析へと収斂してしまうという事態がしばしば見られることとなった。たとえばベニタ・パリーは、こうした

事態を「テキストや言表、記号システムの内的構造の分析がそれに並行するはずの社会的・経験的環境の検証から切り離されるという流行」であると批判し、次のように言う。

……この多種多様で急成長した分野での探求に際して、より歴史的に基礎づけられた方向づけと、より広範な洞察とを訴えることは重要である。何しろこの分野では、植民地主義へと向かわせる物質的な誘因や物理的資源の占有、人間労働の搾取と制度的抑圧が、その視野から追いやられていたからである。
[Parry 2004: 3]

パリーが「*textualism*」（テキスト内在主義・テキスト還元主義）と呼ぶこうした傾向は、たとえばサイドやガヤトリ・スピヴァックとならんでポストコロニアリズムを代表する理論家と目されるホミ・バーバにも顕著に見られる、とパリーは指摘する。

たとえばバーバは、「民衆」や「階級闘争」、「ジェンダー」、「反帝国主義」、「反人種主義」などの「政治的な言及の対象」は「始原的・自然主義的な意味では存在せず」、「フェミニズムやマルクス主義、第三世界映画といった言説の中で構築される *constructed in the discourses* ことではじめて意味を持つ」[Bhabha 1994=2005: 46]と使い、「第一世界と第三世界、北と南との間の収奪と支配の関係を、これら二つの世界の言説上の分断 *the discursive division* によって代表象 *represent* するのは正当である、という確信が私にはある」[Bhabha 1994=2005: 36]と述べる。また確かに、「表象 *representation* の外部には何の知識もあり得ない」[Bhabha 1994=2005: 38]というバーバの主張には、上述の言説分析のインパクトも含めて方法論上はうなずける面もある。とはいえ、以下の一節のように、「社会的排除」や「歴史」と「物語」や「詩学」とが混交する記述に対しては、やはりパリーとともに疑念を抱かざるを得ないであろう。

[現代の]新たなインターナショナルリズムの人口動態とは、ポストコロニアルな移民の歴史 the history であり、文化的・政治的なディアスポラの物語 the narratives であり、農民や先住民の共同体に対する大規模な社会的排除 the major social displacement であり、亡命の詩学 the poetics of exile、政治的経済的難民の暗い散文 the grim prose である。[Bhabha 1994=2005:8]

とはいえ、これはひとりバーバに限った問題ではない。たとえば E. ベーマーは、ペリーが指摘したような問題について、以下に見るとおり極めて自覚的である。

歴史家や社会学者たちが教えてくれるように、多くの人々にとって帝国主義が意味するのは、彼らのコミュニティや住民そのものの破壊ではなくとも、追放や剥奪という過酷な存在 a harsh existence of dispossession and privation であった。もちろん、こうした存在がシンボリズムや観念論、あるいは愛国的文言の中の存在でないことは言うまでもない。不幸なことに、テキストやイメージに関する議論はしばしばこうした帝国のリアリティを覆い隠してしまう。[Boehmer 2005: 20]

にもかかわらず、彼女はすぐに「被植民者に対する帝国の効果や、侵略に対する被植民側の抵抗は、当時の文書における単なる痕跡 mere traces in the writings of time としてしか表れない」[Boehmer 2005: 21]と続け、言説分析に焦点を絞っていく。その結果、帝国主義的支配・収奪構造における「経済交換とモノ・カネの流れの巨大で複雑なネットワーク」に関する記述は、キプリングの詩の中の「世界中の船と港が織り成す織物」の比喻 [Boehmer 2005: 35]でもって代用されることとなる。さらに帝国主義に関する経済的搾取について、ベーマーはレーニンの『帝国主義論』の名前を挙げつつ、それ以前にすでにインドのナショナリスト D. ナオロジや南アフリカの著述家 O. シュラ

イナーが帝国主義の「冷酷さ」や「帝国の貪欲さ」を指摘していると述べる。だが、その結果としてレーニンによる資本主義分析が主題から遠ざけられ、植民者の「動機」や「心情」へと論点が限定されてしまい、つまりは帝国主義に関する分析が植民者たちのテキスト分析によって「代表象」されてしまう、という側面は無視できないであろう。

ここで特徴的なのは、一方では言説(テキスト)の「外部」に「ハードな」現実が存在することを認めつつ、しかし「現実には常に言説と無縁ではなく、言説の中で構築され認知される」という原則を通じて「ハードな」現実が言説=テキストによって「代表象」されてしまう、という構図である。こうした構図については、たとえば『ポストコロニアル理論』として流通しているものの多くが、イングランド文学研究から発生している」という背景[Loomba 1998=2001: 128]や、さらにはアメリカのアカデミズム内における学問分野としての地位の確立との関連も指摘されている。だが理論的にいえば問題は、テキストとその「外部」の現実との関連をどのようにとらえるか、という点にあるだろう。

だとすれば、この問題を考えるために、一度サイドにさかのぼって検討することも無駄ではないだろう。実際、冒頭でみたようにサイドは言説概念の導入によって、それまで「ハードな現実」とみなされていた事物が、実際には言説による構築物であったことを明らかにすることで大きなインパクトを与えたのだが、他方で特に後期のサイドはフーコーに対しても批判的であり[ex. Said 1993: 278=2001: 147-8]、またポストコロニアリズムの傾向に対する批判者としてもしばしば参照される[ex. Parry 2004: 4]人物だからである。

以上のような問題はより実践的な場面、すなわち帝国主義・植民地主義への抵抗・対抗の可能性とその担い手という問題に関わる場面においても指摘される問題である。というのも、ポストコロニアリズムは、しばしばマイノリティや被抑圧者の側からの抵抗の「主体性」を掘り崩してしまう

という批判を受けながらも、抵抗の担い手に対してさえ「言説分析による本質主義批判」を徹底してきたからである。

また実際に、帝国主義への抵抗を背景とする「排外主義や他者差別（『アフリカをアフリカ人に』）の危険性はきわめて切実なのだ」[Said 1993: 214=2001: 42]というサイードの懸念が原理主義として表面化した現状、あるいは1980年代イギリスでの炭鉱労働者スト闘争において「長い歴史に育まれた労働する男たち」[Bhabha 1994=2005: 48]の背後で妻や娘たちのさまざまな問いかけが始まっていたことを指摘するバーバの記述などを踏まえれば、「抵抗の担い手に対する本質主義批判」の意義もまた決して無視し得ないことは明らかであろう。

だが、その結果として、たとえばバーバが、1817年のインドにおける宣教師の『宣教記録』にみられる宣教師と先住民との間のやり取りのうちに「現地の人々の戦闘的なサルタンの記号」[Bhabha 1994=2005: 208]を読み取り、「そこにははっきりと読み取れる強圧の現実を変革することもできるのではないだろうか」[ibid.]述べる個所を見れば、やはりそこにペリーの言う *textualism* の一端を見て取らないわけにはいかない。まして、フランツ・ファノンが具体的に反植民地主義の武装闘争と被植民地知識人との乖離を論じている文脈[Fanon [1961] 2002=1996: 216-220]を「政治的闘争としての文化 *culture-as-political-struggle*」[Bhabha 1994=2005: 63]という（謎の連字符つきの）概念で説明する個所に至っては、そもそもファノンの解釈として妥当なのか、という疑問さえ生じてくる。こうした姿勢のうちに、暴力的な闘争という「ハードな」現実を言説=テキストに回収しようとする *textualism* を見ることは不自然ではなからう。だとすれば、ここでもテキストとその「外部」の現実との関係が問題とならざるを得ないはずである。

そしてここでも、あらためてサイードにさかのぼって検討する意味があるように思われる。というのも、サイードの後期の主著『文化と帝国主義』

では、『オリエンタリズム』では論じられなかった「帝国への抵抗という歴史的経験」[Said 1993: xii=1998: 2]が主題の一つとなっているからである。上記のように、サイードが帝国主義への抵抗における本質主義を懸念し批判していたことと合わせれば、サイードが本質主義的な「抵抗の主体」を想定しない抵抗をどのように構想していたかは、なお検討する価値があるのではないだろうか。

II サイードにおけるテキストとその「外部」

まず、サイードがテキストと「外部」の現実との関係をどのようにとらえていたか、という点から検討したい。

冒頭で見たように、ポストコロニアリズムに対するサイードの大きなインパクトの一つは、「東洋」（および対応物としての「西洋」）が言説による構築物であることを詳細に分析し批判したことにあつた。そして1985年の「オリエンタリズム再考」ではその立場をさらに敷衍し、自称としての「アラブ」や「イスラム」に対してさえ「いかなるものも、たとえ単純な記述的レッテルであろうとも、解釈の領域を超えたり外部に立ったりはできない」[Said [1985]2003: 202=2002: (下)302]と指摘している。こうした姿勢が、先に触れたような、「帝国主義への抵抗における本質主義」への批判へとつながっていることは明らかであろう。

だが一見奇妙なことに、その直前でサイードは以下のように述べている。

たとえば、時代ごとにシェイクスピアが解釈しなおされるのは、別にシェイクスピアが変化するからではない。むしろそれは……[読者や観衆、役者、演出家、翻訳家などから]独立した、確固として自明なシェイクスピアなど存在しないからである。他方、シェイクスピアには独立した存在がまったくないとか、シェイクスピアは誰かがそれを読み、演じ、それについて物を書くたびに、完全に再構成されるものだと言ってしまふのも行き過ぎで

ある。[Said [1985]2003: 201=2002: (下)300-1]

この一節のうち、前半が本質主義批判として首肯できるのに対して、後半はほとんど **textualism** 批判と言ってもよい指摘であろう。だとすると、この一節は「言説や解釈を超越する存在などありえない」が「あらゆる現実が言説や解釈に還元できるわけではない」という、それ自体はいわばきわめて穏当な主張として解釈できることにはなる。だが、それは理論的にはどう理解すべきなのであるだろうか。しかもサイドはこの一節をうけて、「つまりシェイクスピアは制度的ないし文化的な生を送っているのだ **lead an institutional or cultural life**」[ibid.]と述べるのだが、これもこの個所だけではなんとも理解しがたい要約と言わざるを得ない。「制度的ないし文化的な生」とはいったい何のことだろうか。

この疑問に対する答えの一端は、サイドが『オリエンタリズム』に先んじて書いた小論「ヴィーコ」[Said [1973] 2003: 83-92=2006: 108-122]に見出すことができる。この論文の中で、サイドは身体と知恵との関係を神話に託して語るヴィーコを参照しながら、以下のように述べている。

……私は次のように論じたい。言語が自ら意思を持ち、自らを保持したり確立したりするかのようにならわかれが語るのとは、次のことと同じであると。それは、テキストが時間と空間の中でいかに存在するのか、時間と空間のどこに存在するのか、時間と空間の中で何のために存在するのか、について語ること、である。／テキストの理論家にとって、このような記述から考えられるのは、テキストが自己を保持しその役割を果たす上での世界的な諸制度 **worldly institutions** である。言い換えれば、テキストが生成・散種・循環・存続・流通・消滅することも、テキスト生産の物質的 **physical** 環境も、その内的一貫性も、テキストから引き出され得る可能的な意味も、同じようにテキストの第一義的な機能なのである。

[Said [1973] 2003: 91=2006: 120-1]

さらにサイドは、テキストも読者も、等しく「文化内に存在する」がゆえに「テキストが存在する限り存在する規制的 **regulating** ネットワークの一部」なのであり、その限りで自由に意味を創造する存在ではありえない、と続ける。しかもこのネットワークは、「物質的で歴史的な人間社会 **material, historical human society** というより大きなネットワークに内在している」[ibid.]とまで指摘するのである。

これに加え、テキストとは「著者とメディアとの何らかの直接的な接触 **immediate contact** の結果」[Said 1983: 33=1995: 52]として生成するものであるがゆえに、「それが現実にはテキストであること **actually being a text** において世界内存在 **a being in the world**」[ibid.]である、という別の個所の記述もあわせて考えるならば、先ほどの「制度的ないし文化的な生を送る」シェイクスピアの意味も明らかとなる。すなわち、シェイクスピアのテキストもまた、著者シェイクスピアとメディアとの接触によって世界的・物質的存在として生成したのである。そして世界的・物質的存在である限り、テキストのネットワークを含む「物質的で歴史的な人間社会」というネットワークの中で、さまざまな変容を遂げながら散種し流通し存続してきた、というわけである。そしてこのネットワークは「しばしば対立する諸力が織り成す」[ibid.]ものであるからこそ、シェイクスピアはその諸力のネットワークの中で再解釈され続けることになる。

つまり、サイドにとって「いかなるものも解釈の領域の外部に立てない」のは、「いかなる知識も言説の内部でしか存在し得ない」からではなく、「テキストをはじめいかなる存在も対立する諸力の織り成す物質的・歴史的なネットワークの中で解釈され続ける」からだ、と考えられるのである。そしてもしこう解釈してよいのであれば、サイドの姿勢はパリーの言う **textualism** とはむしろ対極にあるとさえ言えよう。というのも、以上の解釈からするならば、「外部の現実が言説による構築

物であることを暴露する」以上に、「そのような構築物を生成する言説が物質的・歴史的ネットワークの中でいかなる位置を占めているか」を明らかにすることこそがサイドの課題となっていたはずだからである。

だが、そうだとすると、サイドが後のポストコロニアリズムに与えたインパクトは一種の誤解の産物だったのだろうか。おそらく、問題はサイドがこの課題をどこまで実際に達成し得ていたか、という点にかかってくるだろう。そしてそうした観点からあらためて『オリエンタリズム』や『文化と帝国主義』を読み返すと、テキストの「外部」にあるはずの現実、あの物質的・歴史的なネットワークが具体的にどのような姿なのか、サイドの叙述からはなかなか鮮明な像を描きにくいことに気づくだろう。

たとえば、『オリエンタリズム』においてサイドは、ヨーロッパがなぜ「東洋」という言説的構築物を必要としたのか、その理由に触れる記述が散見される。たとえば以下のような個所はその代表的なものといえよう。

オリエンがオリエンタ化されたのは、19世紀の平均的ヨーロッパ人から見て、オリエンがあらゆる常識に照らして『オリエンタ的』だと認知されたからだけではなく、オリエンがオリエンタ的なものに仕立て上げられることが可能だった——つまりオリエンはそれを甘受した——からでもある。[Said 1978: 5-6=1993: (上)27]

かつて西洋にとってアジアとは距離感と疎外感との無言の表象であり、イスラムとはヨーロッパ・キリスト教世界に対する戦闘的な敵対心に他ならなかった。こうした恐るべき不変項 *redoubtable constants* を克服するためには、まず最初にオリエンを知り、ついでオリエンに侵入してこれを所有し、しかる後、学者や兵士や裁判官の手で再創造しなければ

ならなかった。[Said 1978: 91-2=1993: (上)214]

以上の2か所に類する記述は他にも見られるが、この2つの記述から受ける印象のギャップに戸惑いはしないだろうか。いったいヨーロッパにとってアジアは恐るべき敵だったのか、それとも要求を甘受する与しやすい相手だったのか。オリエンという強大な敵に対抗するためにこそヨーロッパはオリエンタリズムという形でまず「認識上の征服」を必要としたのだろうか。それとも容易に植民地化しうるような広大な領域という誘因がオリエンタリズムを生み出したのだろうか。

もちろん、さまざまな矛盾をはらみつつ構築されたのが近代オリエンタリズムの「東洋」像であることは言うまでもない。この個所もそうした「東洋」像のはらむ矛盾した諸相を説明した記述とも取れなくはない。だが、だとしたらこれは言説=テキスト上の「東洋」に関する記述なのだろうか。この2か所でサイドは近代オリエンタリズムの言説が成立するための「外的」状況を述べているのではなかつただろうか。実際、『オリエンタリズム』の記述からは、近代オリエンタリズムが「東洋」をどのように言説的に構築したかは詳細に分析されるのだが、当時のヨーロッパとアジア・中東の関係をサイド自身がどのように認識していたのかがなかなか判然としないのである。それはなぜだろうか。この疑問は『文化と帝国主義』と合わせて検討していくと手がかりが見えてくるように思われる。

『文化と帝国主義』でもサイドは、イギリス文学をはじめとして帝国主義文化のさまざまなテキストを詳細に分析しつつ、しかしサイド自身が帝国主義をどのように認識しているのがまともな論じられることはない。だがそれは『文化と帝国主義』の当然の帰結なのである。なぜなら、『文化と帝国主義』の主題の一つは、帝国主義文化のテキストがいかに植民地の現実を認識しそこねているかを明らかにすることにあるからである。

サイドによれば、帝国主義文化は同語反復的な自己完結性・内閉性をもって帝国主義文化を確

証する。いわく、ヨーロッパは「彼ら」とは違う、「彼ら」は非理性的で無力で自己統治能力がない、なぜなら「彼ら」はヨーロッパではないからだ、ゆえに「彼ら」ではないヨーロッパが「彼ら」を統治すべきである、なぜならヨーロッパは「彼ら」とは違い理性と統治能力を有するからだ…… [Said 1993: 106=1998: 204-5]。そしてこの同語反復によって、帝国主義文化は自らの「外部」を覆い隠すことになる。

……この[帝国主義という]システムは、そうした[帝国主義的でないあり方の]可能性を端的に消去し、それを思考できないものになっている。この循環性、すべてを囲い込むこの完璧な閉域は、美的にのみならず、精神的にも、つけ入る隙がないのである。 [Said 1993: 24=1998: 65-6]

だが、サイドによればこの閉域は実際には完璧ではない。というのも、帝国主義文化のテキストは、この同語反復の結果として自らの「他者」である被植民地の現実に言及できなくなってしまうからである。たとえば、サイドによればコンラッドの『闇の奥』はその独特の語りの形式を通じて、「帝国主義には触れることのできないような現実、帝国主義のコントロールをすり抜けてしまうような現実の潜在的可能性」 [Said 1993: 29=1998: 74]として、世界という不安定な現実の暗黒を感じさせてくれる（その点でサイドはコンラッドを高く評価している）。だが、コンラッドにはその「暗黒」が「実際には帝国に抵抗する非ヨーロッパ世界」 [Said 1993: 30=1998: 76]であることを理解できなかった、と指摘する。

さらにサイドはジェイン・オースティンの『マンスフィールド・パーク』の一場面を取り上げてこう指摘する。

ファニー・プライスは従兄に対して、こう打ち明けている。サー・トマスに奴隷貿易のことを尋ねてみたら、『みんなしーんとしてし

まった such a dead silence』と。あたかも二つの世界には、共通する言語が存在しないので、二つを結びつけることなどできないといわんばかりに。確かにそうであろう。しかし、生活のうちにこのような異様な乖離を引きおこしたもののこそ、大英帝国そのものの興隆と衰退と没落であり、その結果としての、ポスト植民地的意識 a postcolonial consciousness の台頭なのである。 [Said 1993: 96=1998: 187]

サイドはこの場面を指して「乖離した経験」と呼ぶが、ここで重要なのは、オースティンのテキストを生み出した「外部」の現実たる「大英帝国そのものの興隆と衰退と没落」はテキスト内部では「死のごとき静寂 a dead silence」としてしか現れない、つまりテキストが「外部」の現実には言及できない、という点である。すなわち、サイドはテキストの「外部」の現実について、「テキストが言及し得ないもの」という、いわばネガの形で描き出すことになるのである²。

サイドのこうしたアプローチは、「帝国主義文化の閉域」の「外部」で生成された反植民地主義的なテキストについても変わらないように見える。だとすると、サイドはまさに文学研究（文化研究）として、あくまで個々のテキストに即して、個々のテキストの中から、そのテキストの置かれた「外部」の現実を描こうとしている、と言える

² これに関連して、私見では、『文化と帝国主義』においてサイドは reality と actuality を区別して用いているように思われる。サイドは、帝国主義文化の循環論的な閉域の「外部」にある現実のプロセスを指して actuality と呼んでいるように見えるのである。そしてそれと対応し、この閉域の「外部」に気づき、これを意識化することを、consciousness 一般と区別して awareness と呼んでいるように思われる。その意味で、サイドが『文化と帝国主義』において描き出すイギリス文学の歴史は、いわば帝国主義文化の閉域が徐々に揺らぎだし、外部の actuality に気づく awareness がテキストの内部で徐々に表面化してくる歴史と解釈できるような思われる。ただ、この点に関しては現時点では網羅的な検討ができておらず、推測の域を出ていない。今後の課題としたい。

のではないだろうか。実際、サイドは別の個所で、アウエルバッハの『ミメシス』に即して以下のように述べている。

……文献学者は彼／彼女の研究の中で、創造性と専心によって人間の歴史を引き受け、それらを研究対象である当該テキストのなかで微細かつ緩やかに展開するスペクタクルとして描き出すのである。[Said [1995] 2003: 456=2009: 186、強調は引用者]

ここからもうかがえるように、個々のテキストの個性性の頭越しに、いわば天下り的に「外部」の現実に関する認識を導入しないこと、むしろ「外部」の現実を「引き受け」つつ、それをテキストの中から、細部にこだわってとらえていくことは、文学（文化）研究者としてのサイドにとっては当然の要請だったのであろう。そうだとすれば、テキストの「外部」の現実について、サイドが自らの認識をまとまった形で提示しないことの意味も理解できるだろう。

だが、テキストの「外部」の現実について「テキストが語りえないものとしてネガティブに描き出す」サイドの影響から、「すべてをテキストの内部でポジティブに語り得る」ととらえる textualism が生じたのはなんと皮肉な、しかし理解可能な帰結ではなからうか。たとえサイドがどれほど苦々しく思っていたとしても。

III 「遡航」はいかにして抵抗となり得るか

次の問題に移ろう。言説分析に基づく本質主義批判を前提としたうえで、帝国主義文化に対する抵抗をサイドはどのようなものとして構想したのだろうか。先に見たように、この問題はまさに『文化と帝国主義』後半の主題である。そしてここでのキーワードは、サイドが「遡航 voyage in」と呼ぶ、被植地知識人の活動である。

被植地が帝国主義の支配に抵抗し独立を目指したとき、帝国主義の政治的・経済的・軍事的支

配と抑圧だけでなく、帝国主義文化のヘゲモニーもまた、抵抗と独立に対する巨大な障害として立ちふさがっていた。やはり先に見たように、帝国主義文化が同語反復的な自己完結性を有する「完璧な閉域」として存在する限り、被植地の声が直接に帝国主義宗主国の人々に届くことはあり得ず、その声は必ず帝国主義文化内部の知識人によって代表されなければならない(このことは『オリエンタリズム』以来サイドが一貫して指摘する問題である)。

こうした状況に直面したときに、被植地知識人が取った選択肢の一つは、『『帝国』の言語で書き、自らが[被植地での]帝国に対する大規模な抵抗運動に有機的に関係していると感じながら、かつてはヨーロッパ人にのみ許された学術研究や批評の技法・言説・装置を使って、宗主国文化と真正面から渡り合う』[Said 1993: 243=2001: 91]ことであつた。上述の通り、帝国主義文化は「完璧な閉域」を装うが、「乖離する経験」を通じて、自らが語りえない「外部」の現実があることに気づかざるを得ない。そこへ「帝国の文化によってすでに確立された諸形式……を再獲得 recover」[Said 1993: 210=2001: 35]することで被植地知識人が帝国文化の「内側」に入り込み、「自らの民のみならず、非白人種の解放など二の次と思っている反抗的な白人の読者たち a resistant white audience」にも語りかける」[Said 1993: 257=2001: 113]のである。帝国主義文化が「語りえない」現実を、帝国主義文化自身のスタイルで語りかけることによって、「乖離する経験」に気づいている宗主国の批判的知識人と呼応することが可能となる。そしてそのことによって帝国主義文化の閉域を打ち破る——これが、サイドの描く「遡航」である。

サイドがこの「遡航」を重視するのは、この活動が排他的民族主義のような本質主義的思考に陥らず、むしろ積極的に帝国主義文化を(ただ受容するのではなく)「再獲得」することで新たな可能性を引き出すからである。すなわち「遡航」は、一方の帝国主義文化と他方の排他的民族主義という、相互に同位的に対立する本質主義的思考の双

方を横断することで、この両者を克服する活動として位置づけられているのである。

だが、このようなサイドの「遡航」に対し、
B. ロビンズは、知識人の声に耳を傾けさせる力とは結局「[知識人にとって批判の対象である]権威に対峙しようという希少性」、要は一種の文化資本ではないのか、と指摘して以下のように言う。

ある観点から見れば、この[「遡航」という]活動は、明らかに階級上昇 *upward mobility* の一形態として記述できるだろう……。宗主国を目指し、また宗主国に受容された第三世界の文学や業績は、結局のところ、宗主国による機会主義的な容認 *opportunistic affirmation* 以外の何によって特徴づけうるのだろうか？
[Robbins 1994: 30]

ロビンズの提起する疑問はつまり、「遡航」が可能なのはそもそも帝国主義文化の枠内にそうした「希少な」声を受け入れるルートが制度的にあるからではないのか、だとすれば「遡航」はもともと帝国主義文化のヴァリエーションとして組み込まれた運動、いわば「体制内」的な運動でしかないのではないか、という疑問である。そしてもしそうだとするならば、サイドのように帝国主義文化の閉域を打破する効果を「遡航」に期待するのは無駄ではないのか、ということになる。

ロビンズは「第三世界の作家たちの集団的なビルドゥングスロマンを目にして、……サイドはむしろ上機嫌だ」[*ibid.*]と述べるが、少し検討してみれば、ここでも実はテキストとその「外部」の現実との関係が問題になっていることが明らかとなろう。サイドが「遡航」を帝国主義文化への抵抗として評価するのは、被植民地知識人の呼びかけ＝テキストが帝国主義文化内部で、いわばテキストそれ自身の力で聞き手を獲得しようと想定しているからである。これに対してロビンズは、それも結局は帝国主義文化内部の制度的な条件によって規定されているのではないかと疑問を提起しているのである。

この問題をサイドにひきつけて考えてみよう。すでに見たように、サイドにとってテキストはそれが成立した瞬間からテキスト相互のネットワークの中に、そしてそのネットワークを含む物質的・歴史的な人間社会というネットワークの中に存在する。その意味でテキストは物質的存在として世界内的存在であり、自らが位置するネットワークの諸条件と無縁には存在し得ない。では、その中でテキストが読み手を獲得するとはどのような事態なのか。サイドはある論文の中で以下のように述べている。

……すべてのテキストは本質的に他のテキストを押しよける、あるいは、もっとよく起こるのは、他のものにとって代わる。ニーチェが明敏に見て取ったように、テキストとは原理的に力の事実 *facts of power* であって民主的な交流の事実ではない。テキストは……世界から注視をもぎ取る *compell attention away from the world* のである。[Said 1983: 45=1995: 74]

ネットワークの中に位置するテキストは、相互に相手を押しよけ、取って代わろうとする。その関係は「原理的に力の事実」であって対等・平等な関係ではない、とサイドは言う。そうすると、一見したところあるテキストが読まれ他のテキストが読まれないのは力関係の問題と考えられよう。だとすれば、たとえばロビンズの言うように、第三世界の文学が読まれるのは帝国主義文化内部での力関係によって規定されているのではないかと、とも思われる。だが、この一節で注目すべきなのは、その「力の事実」が「世界から注視をもぎ取る」ことにある、という点である。実はこの引用個所の少し前で、サイドは「テキストが現にテキストであるのは世界からの注視をこいねがうことによってである」[Said 1983: 40=1995: 64]と指摘し、続けてこう述べている。

……読み手とは意味の生産における完全な

参与者であって、たとえ醜い意味でも無意味よりはまだましであるがゆえに、何らかの意味を生産するよう、死すべきものとして強いられているのである。[Said 1983: 41=1995: 66]

テキストは他のテキストとせめぎあいながら読み手に呼びかけて注視を訴求する一方、読み手もまた「無意味よりはまだまし」なこととして何らかの意味を生み出すよう急き立てられる。逆に言えば、意味を生み出すべく急き立てられている読み手に対し、どのテキストが効果的にその注視を訴求できるかをめぐって、各テキストはせめぎあっているとも言える。そうだとすると、読み手をめぐるテキスト間のせめぎあいは、物質的・歴史的なネットワークにおける力関係によってももちろん大きく左右されるだろう（そもそも物質的な世界内存在たるテキストが読み手の前に姿を現さなければ、読み手に注視を訴えることも不可能である）が、同時に読み手に対するテキスト自身の訴求力によっても規定されていると考えられるのではなからうか。先に見た、「テキストはそれ自身の力で読み手を獲得し得る」というサイドの想定は、おそらくこういうことだったのであるだろうか。

このことは、サイド晩年の著書『人文学と批評の使命』での、以下のような一節からも首肯されよう。

ミシェル・フーコーとトーマス・クーンの著作は、パラダイムやエピステーメーが、気づかれていますようにいまいと、個人の発話の本質を、形作るとまでは言わなくとも屈折させるような力を思考と表現の領域において貫徹させていることを思い起こさせる、重要な仕事である。……。それでも私が言いたいのは、芸術作品であれ、哲学者や知識人、公人の主張であれ、平凡なもの *the usual* と非凡なもの *the unusual*、通常のもの *the ordinary* と特別なもの *the extraordinary* とを振り分けられることこそ、人文的学識、読解、解釈のしるしである。

人文学とは、ある意味で紋切り型 *idées reçues* への抵抗であり、あらゆる種類のクリシェや無思考の言葉に抵抗する。人文的営みが社会経済的環境に決定されるどころか、そうした環境と人文主義者個人との敵対性や対立の弁証法こそが最も興味深い点であって、両者の一致や同一性ではないのだ、と主張しておきたい。[Said 2004: 42-3=2006: 53]

前節末尾で見た、テキストをあくまでその個性に即して分析するというサイドの姿勢は、ここでも容易に見て取ることができるだろう。そしてこの引用箇所は、前節末尾で見た、テキスト「外部」の現実に関するサイド自身の認識に関する問題についても理解の手がかりを与えてくれる。サイドはここでも、テキストが置かれている物質的・歴史的なネットワークの力関係を適切に重視しつつも、「紋切り型」に抵抗するテキストや個人の個性に抵抗の可能性を見出しているのである。

さらにホブズボームに対する書評の中でも、サイドは「目撃者、闘士、活動家、パルチザン、そして普通の人々」よりも「非個人的ないし大規模な諸力の方を重要と考える」[Said [1995] 2003: 481-2=2009: 220]ホブズボームの姿勢にあからさまな苛立ちを示している。それはつまり、ホブズボームの歴史把握がテキストやそれを生み出す個々人の個性をすくい取れていない、という苛立ちであろう。だからこそサイドは続けて、ホブズボームの提示する「概観」と「内側からの視点 *the view from within*」との調和こそが必要はずだ、と指摘する。そしてその書評の末尾で「知的・言語的環境の激変を目にした」20世紀が同時に「大いなる抵抗の時代」であり、しかもその抵抗は「完全に沈黙してはいない」[Said [1995] 2003: 483=2009: 222]とサイドが訴えるとき、その抵抗の担い手が「内側からの視点」でとらえられた個々人であり個々のテキストであることは、もはや言うまでもないであろう。

かくして、文化研究の両義性のひとつの表れとして textualism の問題から始めた本稿の検討は、その帰結としてもう一つの問いをわれわれに投げ返すこととなる。すなわち、個々人や個々のテキストの個別性を犠牲にすることなく位置づけ得る「ハードな」現実の分析はいかにして可能なのか、そしてその「ハードな」現実分析は、そうした個別性のうちにいかなる抵抗の可能性を見出し得るのか、という問いである。

おそらくこの問いは、現在のポストコロニアリズムにおける最前線の問いでもあるだろう。だとすれば、サイドの遺した課題はなお大きいと言わねばならない。

参考文献

Bhabha, Homi K. 1994 *The Location of Culture*, London and New York: Routledge.
 =2005: 本橋哲也ほか訳『文化の場所』法政大学出版局

Boehmer, Elleke 2005 *Colonial and Postcolonial Literature: Migrant Metaphors*, New York: Oxford Univ. Press (2nd Ed.).

Eagleton, Terry 2003 *Figures of Dissent: Critical Essays on Fish, Spivak, Zizek and Others*, London: Verso.
 =2008: 大橋洋一・小澤英実ほか訳『反逆の肖像 批評とは何か』青土社

Fanon, Frantz [1961] 2002 *Les damnés de la terre*, Paris: Editions La Découverte & Syros.
 =1996: 鈴木道彦・浦野衣子訳『地に呪われたる者』みすず書房

Foucault, Michel 1972 *Histoire de la folie à l'âge classique*, Paris: Gallimard.
 =1975: 田村俣訳『狂気の歴史』新潮社
 ——— [1994] 2001 *Michel Foucault. Dits et Écrits*, Paris: Gallimard.
 =1998: 石田英敬編『ミシェル・フーコー思考集成 I 狂気・精神分析・精神医学』筑摩書房

Lomba, Ania 1998 *Colonialism / Postcolonialism*,

London and New York: Routledge.
 =2001: 吉原ゆかり訳『ポストコロニアル理論入門』松柏社

Parry, Benita 2004 *Postcolonial Studies: A Materialist Critique*, London and New York: Routledge.

Robbins, Bruce 1994 “Secularism, Elitism, Progress, and Other Transgressions: On Edward Said’s ‘Voyage In’”, *Social Text* 40: 25-37.

Said, Edward W. 1978: *Orientalism*, London and New York: Routledge.
 =1993: 板垣・杉田監訳／今沢紀子訳『オリエンタリズム』(上・下) 平凡社
 ——— 1983: *The World, the Text, and the Critic*, Massachusetts: Harvard University Press.
 =1995: 山形和美訳『世界・テキスト・批評家』法政大学出版局
 ——— 1993: *Culture and Imperialism*, New York: Vintage.
 =1998, 2001: 大橋洋一訳『文化と帝国主義』(1)(2)みすず書房
 ——— 2003: *Reflections on Exile*, Massachusetts: Harvard University Press.
 =2006, 2009: 大橋洋一ほか訳『故国喪失についての省察』(1)(2)みすず書房
 ——— 2004: *Humanism and democratic criticism*, New York: Columbia University Press.
 =2006: 村山・三宅訳『人文学と批評の使命』岩波書店